

<研究ノート>

## アルメニア中世教会建築

太田 丈太郎

### 1.

アルメニアには由来の古い教会建築が各地にある。アルメニアはローマに十数年先駆けて、紀元後三〇一年にキリスト教を国教とした。カトリコス（アルメニア教会の首長）座のあるエチミアジンがその中心で、五世紀に創建されたリプシメ聖堂、七世紀創建のガヤネ聖堂など、岩を大雑把に切り出したかのようにシンプルで斬新な「キュビスム風」造形が目を惹く。七世紀に創建のズヴァルトノツ聖堂はアルメニア建築古典期（五世紀から七世紀）の傑作とされるが、現在は遺構が残るだけである。

アラガツ山の麓、カサフ川渓谷沿いには十二世紀から十三世紀にかけて建立されたサグモサヴァンク修道院、オヴァナヴァンク修道院があり、外壁のどこかイスラム風の細密な装飾は、盛んな交易の一方で動乱と没落を目前にする末期の華をうかがわせる。アラガツの麓の街エグヴァルドの聖母（アストヴァツァツィン）教会は十四世紀前半の創建で、同じ頃に建てられた観光地として人気のあるノラヴァンク修道院と同じ三層構造をしているが、それ以上に華やかで背も高く、垂直にすくと立つ「オリエンタル」なたたずまいが、電柱にコウノトリが巣をつくる街の長閑な日常とあいまって、魅力は語りつくせない。

とはいえ、アルメニアの教会建築を語るのなら、

西アルメニアを訪れる必要がある<sup>1)</sup>。現トルコ領にある「歴史的アルメニア」でも、アルメニアの歴史と文化の根幹となった非常に重要な地域である。かつてアッシリアと覇を競った古代ウラルトゥの王都があったヴァン湖や、その南岸で十世紀に栄えたヴァスプラカン王国、なによりも十世紀から十一世紀にかけてバグラトゥニ朝の首都だったアニが西アルメニアに位置していた。

現トルコ領内にあったアルメニア教会の大半は、一九一五—一六年にかけての「大虐殺」で破壊されるか、モスクに変えられた。アニも破壊を免れなかったが、二〇一六年にユネスコ世界遺産に登録され、修復作業（ただしモスクに改変されると聞く）がすすめられている。ヴァン湖に浮かぶ島アフタマルの教会も破壊されるおそれがあったが、総じて簡素で重厚なアルメニア教会建築全体から見ると、異様に装飾過多な「世俗的」外壁装飾が、かえってヴァンダリズムを免れる要因となった。現在は、アルメニアはもとより、トルコ各地からも多くの観光客が訪れる名所である。

本稿は、アルメニア中世教会建築から二十世紀ロシアの作家アンドレイ・ペールイ（一八八〇—一九三四）へ通ずる眺望を、滞在中のエレヴァンで概略的に記述したものである。

---

1) 2025年7月26日（土）から29日（火）まで西アルメニア取材した。滞在中のエレヴァンからジョージアを経てトルコに入国後、バヤジット、ヴァン、アフタマル、ムーシュ、エルズルム、カルス、アニなど各地をまわった。



アニ城壁付近から南への遠望。左から救世主協会、アニ大聖堂、マヌチェ・モスク、王宮の高台、アブガムレンツ教会（2025年7月29日、太田撮影）

## 2.

トルコの街カルスから車に乗って一時間ほどでアニに到着する。トルコとアルメニアの国境線に位置する遺跡で、アフリヤン川渓谷の向こうはすぐアルメニア領内である。国境は閉ざされているため、エレヴァンからアニへ出かけるためには北西部国境の街ギュムリを経て、ジョージア（グルジア）のニノツミンダ経由でトルコに入国し、カルスからアニへ向かう。大きく迂回することになる。

アニは十万もの人口をかかえる近東の商業都市として栄え、「千と一つ教会のある街」と言われるほどだったが、いまは盛期をうかがわせるものはなにもない。東に遠くアラガツの荒々しい山頂が見える。枯れた原野に廃墟が広がるだけである。しかし、丁寧に廃墟を読み込んでいくと、往時の殷賑をきわめた都市生活が読み取れる。主要門からメイン街路がまっすぐ王宮まで続いている。教会ばかりでなく、モスクはもとより、浴場や旅館、キャラバンサライの跡がある。水道も布設されていた。敵の急襲や包囲の際、シェルターにもなる地下都市や洞窟都市があった。伝説では、地下通路を通じてアニは、カルスなど中世アルメニアの主要都市とつながっていたとも言われる<sup>2)</sup>。

五世紀から七世紀がアルメニア教会建築の「古典期」とすると、アニの栄えた十世紀から十一世紀

は「復興期」と位置づけられる。キリスト教とともにシリアからやってきたバジリカ式にはじまり、中央ドーム式の聖堂がいくつもの展開を見せた古典期は、アルメニア芸術の「飛躍期」であり、その後のアルメニア建築の範型となった。

「シンプルなバジリカからズヴァルトノツ聖堂まで—これは五世紀から七世紀にかけて建築家たちの歩んだ巨大な道程である。内部空間を統合、コンポジションを集中させる傾向は、赤い糸となって当時のアルメニア建築史を貫いている。それが主導の原則だった。これに発して数多くのさまざまな建築コンポジションが創作されたが、それはアルメニア建築家たちの力強い芸術的探究心を証し立てている。エレレイクのバジリカにはじまり、プトグニヤアルチのドーム・ホール、ヴァガルシャパト [現エチミアジン] 大聖堂、アヴァンヤリプシメの聖堂、最後にズヴァルトノツ—これらは中世初期アルメニア芸術の基本的発展段階をあらわす。これら素晴らしい記念碑的建築群のなかでも、ズヴァルトノツ聖堂こそはアルメニア中世建築の最高峰とすべきだろう。」<sup>3)</sup>

アルメニア建築古典期からアニ最盛期のあいだには断絶があった。イスラームの興隆により、アルメニアはしばらくアラブの支配下に置かれた。バグラ

2) *Акопян Т.Х.* Ани – столица средневековой Армении. Ереван, 1985. С.79.

3) *Якобсон А.Л.* Очерк истории зодчества Армении V-XVII веков. М.; Л., 1950. С.52. 以下、日本語訳はすべて太田による。訳文内の [ ] は訳者による補注である。

トゥニ朝アニの建築家たちは、古典期アルメニア建築のさまざまな成果をあたかもなぞるかのようになり、慎重に粘り強く遺産の研鑽を積み、しかもそれをただ繰り返すのではなく、独自の判断で新しい試みを付け加えていった。

「建築家たちは故国を学び、アラブの襲来のために先行者たちが実現できなかった思想を自己の作品のなかに継承・発展させた。〈…〉かれらは自分以前に創作されたものすべてを芸術構想の基盤とし、その頃には廃墟になっていた個々の建築（ズヴァルトノツ）をただ正確に再現するだけにはとどまらなかった。〈…〉かれらは成熟した考え深い職匠であり、芸術的衝動をほんもの研究作業と巧みに結びつけることができた。」<sup>4)</sup>

古典期の研究からアルメニア建築の復興期がおこった。政治・経済にとどまらず、文化におけるアルメニア・ルネサンスがアニを中心に展開した。古典の研究から新たな建築を模索した代表的な建築家がトルダートである。

生年や生地など、トルダートについて知られていることはまことに少ない。それでも、同時代の年代記作者アソギク（ステファノス・タロネツィ）の記述から、かれの活躍の大枠を知ることができる。それによると、トルダートはアニのほかにも、カトリコス公邸のあったアルギナの教会を建立した。有力な人物による庇護のもとに、ほかにもかずかずの建築を手がけたと思われるが、確実にかれの作と見なされているのはアルギナのカトリコス教会とアニ大聖堂、さらにバグラトゥニ朝ガギク一世（在位九八九—一〇一七）に委嘱されズヴァルトノツ聖堂をモデルとして建立した円形三層構造の通称「ガギカシェン」（アルメニア語で『ガギクの建造物』）聖堂である。アニ大聖堂と建築の様式・傾向が似ていることから、マルマシェン教会もトルダート作である可能性も一概に否定できない<sup>5)</sup>。

いずれにしても、ひじょうに有能な建築家で、その名声はビザンティン帝国の都コンスタンティノーブルにも届いていた。九八六年（アソギクによれば九八九年）、大きな地震のため東方キリスト教の総本山ハギア＝ソフィア大聖堂に「上から下まで亀裂が入り」<sup>6)</sup>、ドームが損壊したとき、トルダートは帝都におもむき、ドームの修復作業を見事にしとげた。かれの手がけたドーム西側の修復部分は、千年以上の時間を経て、いまなお無事である。

トルダートはアルギナの教会を九八七年頃に完成させると首都アニにおもむき、スムバト二世（在位九七七—九八九）からアニ大聖堂を建立するよう委嘱され、遅くとも翌年夏には作業にかかったが、王の逝去により建築は途絶した。スムバト二世の没年にあたる九八九年、トルダートはコンスタンティノーブルに出かけた。ハギア＝ソフィア大聖堂の修復にかかり、四年でそれをなしとげた。その後建築家はアニに戻り、王妃カトラミダ（ガギク一世の妻）から、中斷したままのアニ大聖堂を完成させるよう委嘱された。一〇〇一年、トルダートは大聖堂を完成させた。

トルダートの建築物でも傑作とされるアニ大聖堂は現在修復中で、堂内を見学することはできない。それでも、いまに伝わる写真を見ると、西欧のゴシック建築を思わせる高い天井と、天に向かってそびえる大樹のようなホールの太い柱が、きわめて印象的である。この柱はかつてドームを支えていたが、一三一九年の大きな地震でドームは崩落し、現在もそのままである。以下の記述から、かつての壮麗な姿をしのぶことしかできない。

「入口、とくに西の入口の敷居を越えると、聖堂の内部構造があますところなく目の前に展開する。聖堂内部に入るには、段の高い階段を降りなければならない。降りていきながら早くも拝観者は、まるで上方へ飛翔していくかのように垂直線で区分されたマッスを目にする。この感覚は、聖

4) Токарский Н.М. Архитектура Армении IV-XIV вв. Ереван, 1961. С.232-233.

5) Оганесян К.Л. Зодчий Трдат. Ереван, 1951. С.102. 以下、トルダートをめぐる記述はこれによる。

6) Там же. С.89.

堂内部空間の奥、ドーム下の空間へ歩をすすめるにつれてさらに強まる。ここに屹立する力強い菱形形状の、断面の複雑な柱は、くっきりと光の明暗を伝えながら、光のみなざる上方のドームへ近づくにつれ、コントラストもより強くなる。このような垂直線で区分された光のグラデーションにより、力強い柱は大地からいまも生長していくかのように見え、かるやかに上方へ逃れていき、それにつられて拝観者の目は柱の上方をさまよいつつながら先の尖ったアーチに移行し、堂内空間を閉じるドーム（いまや倒壊したままだが）の球形空間にとどまるのだ。ドーム下の空間はドラム〔ドームを持ち上げる円筒状の直立部分〕の窓から差し入る光に照らされて、明暗は建物下部とは対照的である。〕<sup>7)</sup>

聖堂の内部空間は、建築家が光を演出する舞台のようである。聖堂内を歩むものは歩調に合わせて目を動かす、それによって歩むものの祈りの気分を高めなければならない。静謐はもとより高揚感が、聖堂内の明暗の交替がもたらす効果である。目は上へ向かいながら、心は内部へ沈潜する。光の明暗と、目と精神の力動性がある。トルダートの建立したアニ大聖堂は、アルメニア教会建築作品のなかでも、とくに絶大な効果を及ぼす建造物とされる。

アニ大聖堂の完成後、ガギク一世はトルダートに、ズヴァルトノツと同じ円形三層構造の聖堂を建立するよう委嘱し、建築家は一〇一〇年頃に完成させた。トロス・トラマニヤン（一八六四—一九三四）の作製した復元図を見ると、遊牧民のテントのような、レオナルド・ダヴィンチの考案した円形戦車のような、宇宙船のようにも見える不思議な建物である。同じくトラマニヤンが復元したズヴァルトノツ聖堂と外見はひじょうによく似ているが、建物の大きさ（ガギク聖堂のほうが高い）、プロポーション、装飾などの細部が異なっている。古典を復元しながらも、寸法や細部を違えて「いま

の嗜好を伝える建築芸術家トルダートの「新古典主義」が興味深い。

「トルダートの作品における装飾の特徴は幾何学的であることで、それはトルダートよりも前に植物モチーフに取って代わりはじめていた。そのため、アルメニアでよくあるブドウの房と葉がつらなる蔓をあらわす装飾を、トルダートはガギクの聖堂で採用しなかった。原型のズヴァルトノツでは、この装飾が好んで用いられているにもかかわらず。幾何学的紋様が編み込まれるひじょうに細かな装飾ですら、トルダートは正確ではっきりとした編み模様を追求し、厳密な構造から装飾的な帯を創り出した。」<sup>8)</sup>

残念ながら、トルダートが活躍した十世紀にはすでに崩壊していたズヴァルトノツ聖堂はもとより、ガギク聖堂もいまや廃墟である。その遺構から、かつての異様で壮麗な外観をイメージするのは難しい。円形三層構造であることから、堂内には光がさまざまに屈折し、視点の移動とともに明暗が映画のように移行したことが想像される。

「環状のギャラリーを歩いていると拝観者の前に、様相をつぎつぎに変えながら建物の中央空間が徐々に展開する。その際、どの見え方においても内部空間は、柱と柱の間から把握されることになる。内部は建築空間が入れ替わる絵のようなものとして認識される。その後拝観者はギャラリー全体をまわって、交替する絵のすべてを目にしたくなる。環をひとめぐりして拝観者は空間の奥へ行こうとするが、その壮大な高みにおどろき、拝観者はその場に立ちつくしてしまう。言い換えれば、柱列を踏み越えた拝観者は、絵のような景物の印象から離れ、おごそかな十字状の中央ドーム式空間へ入るのだ。そこでは力強いドームが君臨し、空間のすべてを支配している。」<sup>9)</sup>

7) Там же. С.45-47.

8) Там же. С.53-54.

9) Там же. С.67, 77.

拝観者は環状のギャラリーをまわりながら交錯する明暗により気分を演出され、内部へ踏み込むとともに、ドームの君臨する高みの明るさと、天の高さそのものに立ちつくすのだという。トルダートによる見事な空間演出だったことが想像される。

### 3.

アニ遺跡のメイン街路を南へ歩いていくと、はるか丘のうえに見えるのが王宮跡である。アフリヤン川とアニ川のきざんだ深い断崖に挟まれた三角形の高台に位置する。

一八九二年と九三年にサント・ペテルブルク大学東洋学部のニコライ・マール（一八六五—一九三四）が最初の発掘調査をおこない、しばらく中断されてのち、一九〇四年から一七年まで毎年調査は続けられた。発掘にはマールの弟子ヨシフ・オルベリ（一八八七—一九六一）はもとより、建築家トロス・トラマニヤンほか、後にエレヴァン首席建築士として活躍することになるニコライ・ブニャトフ（ブニャチヤン；一八七八—一九四三）をはじめ若手のニコライ・トカルスキー（一八九二—一九七七）らが参加し、アルメニア中世建築研究でも重要な業績を残すことになる研究者がアニの発掘調査から育っていった。遺跡のメイン街路を調査員たちは「マール通り」と名づけた<sup>10)</sup>。出土した遺物はアニ遺跡内に創設された博物館に収められたが、一八年にアニの属するカルス州（一八七七年の露土戦争以来ロシア領）がブレスト＝リトフスク条約でトルコに割譲されると、博物館は破壊され、行方の知れなくなった遺物も数多い。

王宮の高台から「マール通り」を見下ろすと、北に向かって広がる二つの溪谷に挟まれた三角形が、メイン街路によって東西に分けられていることがわかる。右手の東側にはアフリヤン溪谷沿いに大聖堂

がそびえたち、左手、西側の彼方にガギク聖堂の丸い廃墟が見える。研究者は、王宮の建築にもトルダートが関わったのではないかと推測している。

王宮は西から東へ通じる回廊を挟んで、北側と南側に分かれていた。部分的に二階建てになっている北側にホールが三つあり、賓客の宴席や、その他祝典、儀式用に使われていた。マールによると、北西の角にあるホールはガギク聖堂と「ツァフコツァズル」（花壇の溪谷）に向いており、その向こうにはアラジャ山地のゆるやかな山嶺が見えていた。二つめは東にあり、アニ大聖堂とアフリヤン溪谷に面し、彼方にはアラガツの奇怪な山頂が見えていた。三つめは王宮の北東部にあり、下に見える街そのものに面していた<sup>11)</sup>。晴れ渡った空を背景とする眺望の素晴らしさはもとより、夜の都市は王宮からどのように見えたのだろうか。

眺望にかんがみ王宮ホールの配置が計算されていることから、王宮と大聖堂、ガギク聖堂の三点は、セットの建造物として構想されたのではないとも言われる。北東部のホールにある柱の基部がガギク聖堂と同じであるため、ガギカシェンと同じ頃、一〇〇一年から一〇年の間にホールが造られたと推測される<sup>12)</sup>。仮に王宮がトルダートの設計によらずれば、単一の構想、パースペクティブに基づく周到な都市デザインが読み取れる<sup>13)</sup>。

さらに興味深いことに、規模はガギク聖堂に及ばない小さな建造物だが、同じ円形構造の一〇三六年に建てられた救世主教会と、アブガムレンツ教会（九九四年の創建）は位置的に平行な関係にある。互いから六四〇メートル離れてはいるが、王宮から見ると、右手のアニ大聖堂の背後、アフリヤン溪谷沿いに救世主教会が見え、反対の左手、ガギク聖堂の手前、ツァフコツァズル溪谷の崖沿いに、それと呼応するかのようにはアブガムレンツ教会のシルエットが、平原に広がる街の風景を飾っていた<sup>14)</sup>。

10) Орбели И. Краткий путеводитель по городищу Ани. СПб., 1910. С.7.

11) Марр Н.Я. Ани. Л.; М., 1934. С.68.

12) Халпахчян О.Х. Гражданское зодчество Армении. М., 1971. С.104.

13) Оганесян К.Л. Зодчий Трдат. С.10.

14) Арутюнян Вараздат. Город Ани. Из истории градостроительства средневековой Армении. Ереван, 1964. С.32.

現在の廃墟からは想像しにくいのが、大聖堂や教会、モスクなどの宗教建築以外にも、とりわけメインの街路付近には家屋が密集していたものと考えられる。職人や商人の住む家屋にまじって都市の「ランドマーク」ないしは「結節点」を据え、垂直線の都市シルエットを配置する構想は、現代にも通じるところがある。トルダートは、たとえばアラガツ山中腹のアムベルド要塞のような人里離れた山上や断崖に建造物を建てたのではなかった。あくまで人の密集する街路や広場に、人家と隣り合ったところに聖堂を建てたのだった。建築家として「街の物差しに合わせて構想し、街のなかに自分の建築作品の本性を見出した」<sup>15)</sup>のである。

#### 4.

アルメニア中世教会建築を語るうえで、避けて通ることのできないのがオーストリアの美術史家ヨーゼフ・ストルジゴフスキ（一八六二—一九四一）の著書『アルメニア建築とヨーロッパ』（一九一八）である。五世紀（ストルジゴフスキによると四世紀）から七世紀にかけてアルメニア各地で発生した中央ドーム式建築のルーツをバルシアなどの「東方」に求め、それはアルメニアを経て西ヨーロッパに伝播した、というのがその学説の骨子である。とりわけ、トルダートのアニ大聖堂は西欧北方のゴシック建築を準備したとされる。

教会そのものも、あたかも胚が細胞分裂を繰り返して複雑な組織を形成するように、かれの見立てによると原型（*Urform*）はドームを頂く正方形で、その周囲にアプスが増殖し、基部の正方形も次第に円形に変異する。最終的には基部の長方形にドームを据えたタイプが現れる、というものだ。自身アルメニア各地を訪ねた（一九一三年九月十四日から十月四日まで）が、トラマニヤンから提供されたアルメニア教会建築のおびただしい図面と写真がなよりの論拠となっている。アルメニア教会建築のタイポ

ロジー（ただし十一世紀まで）から、その変遷と伝播を語るのがストルジゴフスキの特色である。

とはいえ、本来は土地の気候や生活に密着しているはずの教会を図面だけから解釈するせい、アルメニア教会のルーツとされる東方の建築物と外見・機能上の乖離があり、時代の考証にもアナクロニズムが見られ、著書の発表当時から批判が絶えなかった。また、西欧への東方文明の波及と影響をめぐる十九世紀末から二十世紀初めの思潮に乗りながらも、ストルジゴフスキの問題とする東方はあくまで「アーリア系」（イランとアルメニア）の東方であり、第一次世界大戦前後のドイツ民族主義的傾向が濃厚とされる<sup>16)</sup>。

誤謬の多い著書とはいえ、アルメニア教会建築を初めて本格的に西欧学界の中心に紹介したばかりか、トロマニヤンが長期にわたり実地で計測し、作製した図面を広く知らしめた功績は大きい。長年の発掘調査とデータ計測をもとに、アルメニア中世建築史を書きあげたトカルスキーは、ストルジゴフスキの著書を「西欧の研究文献で初めてアルメニア中世建築家作品の独自性と意義を示した」<sup>17)</sup>として高く評価した。

『アルメニア建築とヨーロッパ』第一巻第一部のロシア語訳が二〇一一年にエレヴァンで出版され、現在までに第一巻第二部（二〇一八年）までが刊行されている。

\*

アンドレイ・ベールイは一九二七年から二九年、春から夏にかけて、コーカサスに滞在した。おもにチフリス（現トビリシ）を拠点として各地を訪問したが、二八年（五月十八日から二十五日まで）と二九年（四月三十日から五月二十一日まで）はアルメニアのエレヴァンに滞在したことで特筆される。二八年の滞在はアルメニアにおける社会主義新国家建設をめぐるルポルタージュ的な著書『アルメニア』（一九二八）となって発表されたが、アルメニアから得られた視野の拡大と歴史的・文化的洞察の

15) Оганесян К.Л. Зодчий Трдат. С.25.

16) Christina Maranci, *Medieval Armenian Architecture: Constructions of Race and Nation*. Leuven, Peeters, 2001 (Hebrew University Armenian Studies, 2), p.153-158.

17) Токарский Н.М. Архитектура Армении IV-XIV вв. С.5-6.

深化、知り合った人物との交際に鑑みるなら、二九年の滞在のほうが意義深い。バールイの残した未刊行手記のたぐい、とりわけ妻クラウジヤ・ワシーリエワ（一八八六—一九七〇）の日記から、バールイの考察や目にした事物について、かなり詳細に再構成することができる。なお、アルメニアでバールイ夫妻が旅行中に目を通していたのは、H・F・B・リンチ（一八六二—一九一三）の二巻からなる浩瀚な旅行記『アルメニア—紀行文と研究』（一九〇一）だった<sup>18)</sup>。

アルメニアでバールイに強烈な印象を与えたのが、中世教会建築である。すでにトルコ領になっていたアニを訪問することはなかったが、チフリスからレニナカン（現ギュムリ）を経てアニへ到着した列車の窓から、中世アルメニアの首都について思いをはせた。

「アニ駅に到着した。

いにしえのアルメニアの廃墟が目前にある。すぐそこにある。車両から見えるようだ。カルス州といっしょに、いまはトルコに属している。〈…〉九世紀に書物が堆積していくつもの図書館の生じた場所、アルメニアの聖堂建築が起こって西と東を結び、シリアの様式と、初期ロマネスク様式やロシアの様式を繋いだ場所の方向を見ている。〈…〉ここでいくつもの建築様式が精妙きわまらない結び目となったが、それはやっとのことで解きほぐされ、ユニークなフォルムがヨーロッパに広まり開花した時代を解明するための手がかりが得られた（最新の研究データによる）。<sup>19)</sup>

ここで念頭に置かれているのはストルジゴフスキの著書である。一九二八年五月二十日、バールイは画家マルチロス・サリヤン（一八八〇—一九七二）の案内でズヴァルトノツを訪ね、その後エチミアジンの図書館で写本類を見学した。その折にバールイは展示物の案内をしたセネケリム・テル＝アコピヤ

ン（一八八二—一九三七）から、ストルジゴフスキの著作を紹介された。

「〈…〉あとでわたしはエチミアジンで、図書館の写本管理者セネケリム・テル＝アコピヤンから、オーストリアで刊行された二巻からなる労作を見せてもらった。その本ではとくにこうした問題が論じられている。九世紀以来、アルメニアの建築様式が世界に向けて声をあげている。その後は廃墟となり、声をあげつづけている。ここでマールが活動し、発掘された遺物はエレヴァンの博物館に収められている。」<sup>20)</sup>

翌二九年、再び訪れたエレヴァンで、一ヶ月にも満たない滞在中、バールイは何度か公共図書館に通い、ストルジゴフスキのドイツ語原書を借り出し、メモをとりながら精読した。前年にエチミアジンで受けたアルメニア教会と西欧教会建築の相関をめぐる説明がよほど気になったものと思われる。そして著作から得た感銘と教会建築をめぐる新たな得られた視座を、あとで述べるように、友人の社会思想家イワーノフ＝ラズムニク（一八七八—一九四六）に宛てて書き送った。バールイの残したメモを見てみよう。

「一九二九年五月」

「六日、エレヴァン。〈…〉図書館から本を借り集めた。ついでにストルジゴフスキ『アルメニア建築とヨーロッパ』第一巻（一—四五五頁、ウィーン、一九一八年）も。〈…〉

「八日、エレヴァン。ストルジゴフスキを耽読。建築とトラマニヤンのことを考える。〈…〉

「十四日、エレヴァン。図書館に立ち寄ってストルジゴフスキの第二巻を借りる。〈…〉

「十九日、エレヴァン。〈…〉夕方と一晚中、本を耽読。ストルジゴフスキとペルシア芸術についての本（建築、絨毯、装飾）。」<sup>21)</sup>

18) H. F. B. (Harry Finnis Bloss) Lynch, *Armenia: Travels and Studies*, London, 1901, 2 vols.

19) *Белый Андрей*. Армения. Второе дополненное издание. Ереван, 1997. С.18.

20) Там же.

21) *Белый Андрей*. Ракурс к дневнику. Материал к биографии (составлен для личного пользования) //

二巻あわせて九百頁を超える大著を短期間で集中的に読んでいる。ペールイのストルジゴフスキ耽読ぶりは、妻ワシーリエワの日記からより詳しく読み取ることができる。

「五月四日 [ペールイのメモと日付に異同がある] ナルコムプロス [教育人民委員会] から図書館へ出かけた。本の奔流。ストルジゴフスキを持ち帰る。〈…〉

「五月七日 [アシタラクから] 戻って、読書とメモに取りかかる。〈…〉 ボリス・ニコラエヴィチ [ペールイ] はストルジゴフスキを自分流に解釈しはじめている。その考えでは、ズヴァルトノツはカンパネッラの『太陽の都』で、ルネサンスの建築様式はアルメニア教会の内部が外に出たものだという。ルネサンスのキューボラはかつてあった教会内部のドームだという。そして聖堂の原型はペルシアに発する、ということになる。オルムズド [アフラマズダ] の聖堂—太陽の聖堂—も、聖堂そのものにほかならない。」

トシマージ・カンパネッラ（一五六八—一六三九）のユートピア都市についてペールイは一九一八年にモスクワで、二〇年五月にはペテログラードで講演をしたことがある。『太陽の都』刊行三百年を記念する「ヴォリフィラ（自由哲学協会）」での催しだった。ペールイはイワーノフ＝ラズムニクらとともに協会の設立メンバーだった。「太陽の都」にある丘の頂上に神殿がある。それをペールイは言ったものらしい。

「この神殿は完全な円形で、周囲には壁がなく、そのかわりに太くて非常に美しい円柱に囲まれています。大きな円屋根の真中にさらに小さな円屋根があり、そこに明り取りの天窓が付いているの

ですが、これは神殿の中央にただ一つ置かれている祭壇のちょうど真上になっています。神殿を囲む円柱の周囲は三百歩少々で、円屋根を支える円柱の外側には八歩の幅の柱廊があります。」<sup>22)</sup>

たしかに、規模はともかく、ズヴァルトノツの円柱のならば柱廊の廢墟をそのままに想起させる記述だが、ともあれ先を見よう。

「五月十二日

〈…〉 またもストルジゴフスキ。ボリス・ニコラエヴィチに抜き書きを読みあげる。ストルジゴフスキの基本概念は以下の通り。地中海という円環を突き破り、東方と北方に向かう必要がある。この境界（つまりところローマ）から出て、全世界的歴史の水平線に躍り出る必要がある。東方を拒否することは意識の薄弱・無力にはかならない。イランこそヨーロッパ建築揺籃の地である。アルメニアは仲介者である。アルメニアは西ヨーロッパにイランの東方的建築様式を伝えた。東方各地で同時に発展したものが、ヨーロッパでは時間における様式の交代となった。いまや「東方かローマか」「東方かビザンティンか」が問題なのではない、われわれが本当の過去へ回帰することを望むか望まぬかが問題なのだ。」<sup>23)</sup>

ワシーリエワの記述には、地中海のバジリカ式にかわって「ペルシア起源」の中央ドーム式が出現し、西欧教会建築におけるロマネスク様式、ゴシック様式につながったというストルジゴフスキの主張の大枠ばかりでなく、その根幹「北方への回帰」が写しとられている。南方の地中海的・ラテン的ローマに発する西欧文明はいまや危殆に瀕しており、文明としての活力を回復するためにはアリア的原点—イランおよびアルメニアの東方とゲルマン的北方—に回帰する必要がある、という人種主義的史観である。オスヴァルト・シュペングラーの『西

Литературное наследство. Т.105. Андрей Белый. Автобиографические своды. М., 2016. С.525-526.

22) カンパネッラ『太陽の都・詩篇』（坂本鉄男訳）、現代思潮社、一九八九年（第五刷）、八頁。

23) Бугаева К.Н. Дневник 1929 года // Лица: Биографический альманах. Вып.9. СПб., 2002. С.126, 131, 136-137.

『洋の没落』は、ストルジゴフスキの主著と同年の一九一八年に刊行された。

## 5.

総じて、アルメニア滞在をめぐるベールイのメモは、一九二八年よりも二九年のほうが詳細で、具体性に富む。知り合った個人名はもとより、訪問した土地もずっと具体的である。アルメニアの地理を多少とも知る人なら、ベールイが目にした風景をまざまざとイメージすることができる。二九年五月七日、サリヤンの案内で出かけたアシタラクと、その周辺の記述を見てみよう。ベールイがストルジゴフスキを読みはじめた日の翌日である。

[一九二九年五月]

「七日、エレヴァン。アシタラクとオヴァナヴァンクへ出かける。〈…〉アラガツの麓。アラ山とセミラミス山。カサフ溪谷、アシタラク。聖オヴァンネス教会（オヴァナヴァンク）、聖ワルワーラ修道院、ムグニ修道院（七世紀）（アシタラクとオヴァナヴァンクのあいだにある）、「赤い教会」[カルムラヴォル]、聖マリネ教会（アシタラク市内）を見学。〈…〉オシャカン村。エチミアジン経由で戻る。トラマニヤンをめぐる会話。〈…〉」<sup>24)</sup>

アラガツ山の麓、アラガツォトゥン県のアシタラク市周辺をめぐった様子である。カサフ溪谷沿いには古い聖堂が多い。なかでも、カルムラヴォルは小さいながら七世紀の創建で、朱色の瓦を葺いた屋根から「赤い教会」と呼ばれている。

ほかに溪谷沿いには五世紀の創建になるツイラナヴォル（アンズ色の教会）や、十三世紀に建立されたスピタカヴォル（白い教会）がある。オシャカン村はアシタラクから南へ約四キロのところにある。アルメニア語のアルファベットを考案したメスロプ・マシュツ（三六二-四四〇）の墓所がある。

注目すべきことに、一九一三年九月十七日から十八日にかけて、ストルジゴフスキ自身もオヴァナヴァンクからアシタラクのカルムラヴォルを訪ね、オシャカン村を經由してからエチミアジンへ出向いた。論証はできないが、アラガツ山麓のカサフ溪谷沿いでベールイはストルジゴフスキと同じ経路を意図的にめぐったのではなかったか。もっとも、ストルジゴフスキは、十一世紀までの教会建築という調査枠を超えるにもかかわらず、エグヴァルドの美しい三層構造の聖堂を忘れずに調査している<sup>25)</sup>。

見るべき修道院はアラ山を左手にすると、カサフ川に沿って北からアストヴァツンカル、サグモサヴァンク、オヴァナヴァンクと続くが、急峻な溪谷の向こうにこんもりとせりあがるアラ山の眺めは、オヴァナヴァンクよりも、サグモサヴァンクでのほうがはるかに素晴らしい。映画監督セルゲイ・パラジャーノフも映画『ざくろの色』（一九六九）で、ロリ地方のサナイン修道院やアフパト修道院とともに、アラ山を背景とするサグモサヴァンクを撮影に使った。

アラ山とセミラミス山をめぐって、地元では言い伝えがある。アッシリアの女王セミラミスが美男のアルメニア王アラに恋をした。女王はアラ王を誘惑しようとしたが、王はそれをしりぞけた。セミラミスはアルメニアへ攻め込み、アラ王を殺したという伝説である。

カサフ溪谷を下ったはるか南に、アララト山の双峰（マシスとシス）がそびえている。晴れていれば、雄大な青い稜線を溪谷の彼方に見ることができる。アララトを南の支点とすると、アラガツとアラは逆三角形を形づくる。数十万年前から人が居住してきた、豊かで広大な平地がここにある。

五月十五日、ベールイ夫妻はサリヤン夫妻と馬車でガルニとゲガルト修道院へ出かけた。修道院に一泊した。ガルニにはアルシャクニ朝の夏の離宮があり、太陽神ミトラスを祀る神殿がある。近くには玄武岩の柱状節理がどこまでもつづく「石のシンフォニー」がある。道中をともに過ごした経験は、両夫

24) *Белый Андрей*. Ракурс к дневнику. С. 525.

25) *Стржиговский Йозеф*. Архитектура армян и Европа. Т.1. Книга первая. Ереван, 2011. С.25.

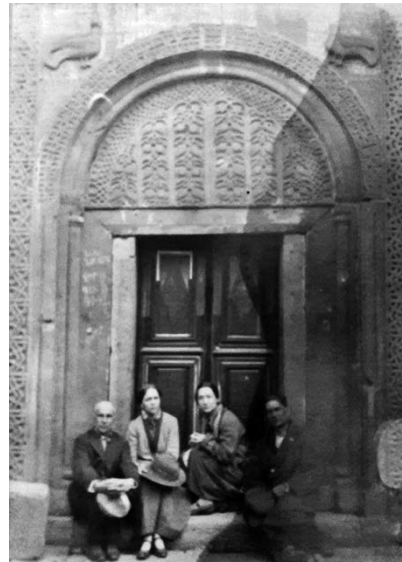
妻をとくに近づけた。

「アルメニアには困憊させられました、人との交際（サリヤン、オヴァネシヤン、イサアキヤン、プロレタリア詩人ホレンなど）においても、驚くべき景観（カサフ渓谷、アシタラク、ガルニ渓谷とゲガルト修道院など）の点でも、認識上の題材（アルメニア古代の歴史遺産）としても、このうえなく輝かしい時を与えてくれました。垂直に切り立った岩の下、ゲガルトの古い修道院で過ごした夜、いろいろな事件のあった道中のことは、決して忘れられません。このことは、ほんの数語でお伝えすることはできません。〈…〉」<sup>26)</sup>

エレヴァンを後にして、滞在先のクラスナヤ・パリャーナからベールイは、イワーノフ＝ラズムニクにこう書き送った（一九二九年六月五日）。ベールイ夫妻は当初、グルジア滞在後の八月にはアルメニアへ戻るつもりでいたが、結局チフリス近郊のコジョリに長居することになり、エレヴァンを再訪することはなかった。

一九二九年八月二十六日にモスクワに戻ってから、さっそくベールイはイワーノフ＝ラズムニクに宛てて、コーカサスでの体験を総括する長文の手紙を書いた（八月三十日）。そこでは、コジョリのアゼウラ要塞に登り、山嶺を見渡しながら水彩画に打ち込んだことから得られた色彩と光、空間把握、目と手の連動をめぐる直観のことや、アルメニアで目にした聖堂のこと、耽読したストルジゴフスキの大著についての所感が詳細に述べられている。

「〈…〉戻りましてからこの四ヶ月を振り返ってみますと、今年いちばん強烈な印象をもたらしたのはアルメニアであるとわかりました。もっとも、わたしたちはエレヴァンに三週間と少しばかり滞在しただけですけれども、エレヴァン



ゲガルト修道院で（1929年5月16日）<sup>27)</sup>

も、近郊へ出かけた三度の旅行（とくにアシタラク、ガルニ渓谷とゲガルト修道院）もきわめて深く心に残りました。〈…〉わたしたちは今年、アルメニアの過去、とりわけアルメニアの建築に、視覚的にも認識のうえでも興奮させられました。エレヴァン滞在中、わたしたちは公共図書館から借りだした本に埋もれ、読みふけりました。それで自分たちでも驚くような結論に達したのですが、そのことは一言で申しあげるわけにはまいりません。始終ストルジゴフスキ（ウィーンの大学教授）の二巻からなる巨大な書物『アルメニア建築とヨーロッパ』（ドイツ語）に圧倒されればなしでした。ストルジゴフスキは建築の史家・理論家のなかでは、象どころかマンモスです。見かけが大物だからではなく（現に大物ですけれども）、思考傾向がこれまでこの分野で言われてきたことのすべてを凌駕しており、題材を吟味しつくしているからです。」<sup>28)</sup>

26) Андрей Белый и Иванов-Разумник. Переписка. СПб., 1998. С.635. Ованнес・オヴァネシヤン（一八六四—一九二九）、アヴェチク・イサアキヤン（一八七〇—一九五七）はともにアルメニアの著名な詩人である。

27) 「М.マルチロス・サリヤンの家・美術館」のアーカイヴより。Фонд «Дома-Музея М. Сарьяна». ДММС-1083 / Ф-148/71. 左からベールイ、ワシーリエワ、リュシク・サリヤン、マルチロス・サリヤン。

28) Андрей Белый и Иванов-Разумник. Переписка. С.647.

つづいてパールイは、ストルジゴフスキの論点を要約して、イワーノフ＝ラズームニクに披露する。先に紹介したワシーリエワによる日記の記述以上に、ストルジゴフスキの著作に触発されたパールイの史観があらわれていることに注目したい。

「〈…〉かれ〔ストルジゴフスキ〕は西欧建築の原型を探究しています、その原型からさまざまな様式が枝分かれます。〈…〉建築における西欧の視野は狭い。それは地中海によって閉ざされている。ストルジゴフスキは東方に突破口を求めます。ビザンティンの根をシリア建築に見出し、さらにペルシアを探究します。そして早くも紀元三世紀頃にはペルシアのフォルムから化学的な統合物が結晶し、全ヨーロッパ建築史の原型が三つの基本的な変種となって現れたことを示すのです。それは同時期に三つの地方で形成されました。当時のアルメニアの地方です。原型はアルメニア教会（もしくはペルシアのオルムズド〔アフラムズダ〕を祀る聖堂から精練されたもの；正方形にドームが載る）。ただし、古代アルメニアにとって同時期におこった地理上の様式は、ヨーロッパにとっては様式が交替する時間的な生成史となりました。あるフォルムはロマネスク様式をおこし、別のフォルムはゴシックを、そして第三のフォルムからはルネサンスのドームが生じました。原型を同じくするこれら三つの変種は、とうぜんヨーロッパでは無数の変種に分岐します。しかし、これらヴァリエーションすべてに通ずる主題、コンポジションは、明らかにアルメニアの歴史遺産（アニ、アシタラク、ヴァン、エチミアジンなど）に感じ取ることができるのです。〈…〉こういう次第で、ヨーロッパの原型はペルシアに発し、二十世紀においてふたたびペルシアに回帰しつつあるのです。未来はヨーロッパからアルメニアを経て、ペルシアに至ります。こういう最終的結論をストルジゴフスキは出していませんが、二巻の大著からしぜん伝わってきます、この労作ではアルメニアがとことん考究されているばかり

でなく、西欧、ペルシアのみならず、インドもウクライナも、クレムリンの聖堂やグルジア（アルメニア建築の傍流）までもが取りあげられているのです。すべてにかれの分析が向けられています。」<sup>29)</sup>

ここで言われているアルメニアの「三つの地方」だが、ごく大まかに言えば、バジリカ式のエレリク聖堂（五世紀）、アプスのある正方形のうえにドームを載せた中央ドーム式のマスタラ聖堂（五世紀）、そして身廊と側廊を備えた長方形にドームを載せたアルチ聖堂（七世紀）をイメージするといいただろう。北にアラガツ山を間近にのぞみ、アララトを南に遠望しながら広がる平地の東西が、上記聖堂の位置になる。エレリクはトルコとの国境のあるアフリヤン川沿いの西に、アルチはアラガツのほぼ南麓、マスタラはエレリクとアルチのほぼ中間に位置する。「歴史的アルメニア」に存在していた重要な教会群（テコルなど）は破壊され、実見することはかなわないため、私が実際に目にできたかざりの実例をここにあげている。

ジョージア（グルジア）の教会はアルメニア教会と一見似ているが、五～七世紀頃の初期（ムツヘタのジヴァリ教会と、エチミアジンのリブシメ教会の類似）はともかく、とくに四五一年のカルケドン公会議（アルメニア教会はペルシアとの戦争のためキリストの本性をめぐる教義論争に不参加）以降は大きく分岐し、アルメニア教会建築の「傍流」とはともいえない。聖堂の外形や内部空間の処理はもとより、細かな装飾モチーフがアルメニアとジョージアでは異なっており、同列に扱うことは許されない。一見無定型に絡みあうかに見える紋様をよく観察すると一定の幾何学パターンが見えてくるジョージアの教会建築に対し、アルメニアの教会装飾（とりわけハチカルの透かし彫り）は、生命そのものが生成と消滅を無秩序に繰り返す曼荼羅のように紐と紐が絡み合い、縁を結ぶかのような奥底の知れない深みがある。とはいえ、それはさておく。

一ヶ月にもならないエレヴァン滞在中に、これほ

29) Там же. С.648

どの内容を図書館から借りた九百頁を超える大著から読み取ったベールイの集中力には驚嘆させられる。おそらく、思想的傾向のうえでストルジゴフスキに自分と近接、ないしは共振するものを鋭敏に感じ取ったせいだろう。建築の共時的同時発生が通時的様式交替に変ずるという視点、あるいは「個体発生は系統発生を繰り返す」としたエルンスト・ヘッケル（一八三四—一九一九）風の生命発生変態論—これをベールイは自作『コーチク・レターエフ』（一九一八）で実践した—は、遡及するならゲーテのメタモルフォーゼ論に通ずる。それはベールイにとって、神秘思想家ルドルフ・シュタイナー（一八六〇—一九二五）の教説を強く想起させるものだった。アルメニア中世教会建築はベールイにドルナツハを、自分もノミを手に参加した第一ゲーテアヌム建設を、そのドーム建築を強く連想させた。カサフ溪谷のオヴァナヴァンク（聖ヨハネ修道院）を訪れたとき、名称からベールイの脳裏に「ヨハネスバウ *Johannesbau*」（ヨハネス建築、ゲーテアヌムの別名）の音が閃いたにちがいない。

## 6.

一九一二年五月、ベールイは最初の妻アーシャ・トゥルゲーネワ（一八九〇—一九六六）と一緒にシュタイナーと知り合い、熱心な弟子となった。一四年初めにはドルナツハへ移住し、第一ゲーテアヌム建設に参加した。それは繭のような大小二つのドームが交差する聖堂で、コンクリートの基部のほかは木造だった。

「大きなドーム空間は約一〇〇〇人のための観客席となり、小さなドーム空間はその舞台となっていた。二つのドーム空間は相互に自らを反映し合うものであり、『感覚的なもの』に対する『超感覚的なもの』、『物質的なもの』に対する『精神的なもの』というそれぞれの二元的対極が対極であ

りながら一つのものに合一してゆく、その闘いと調和の原理がこの中に生きていた。」<sup>30)</sup>

ドームはひとつの生きた有機体であり、そこでは反対物が一致するばかりでなく、フォルムが生きものそのもののようにその場で自在に変化し、生命のメタモルフォーゼをそのまま体现するものでなければならなかった。「次から次へ時間のなかで生成するものが空間的なものに変ずる」<sup>31)</sup> 場所にほかならなかった。まさしくここへ「コトバ」が降臨し、音声に変じて受肉される。大きなドームは人間の頭蓋に相当すると考えられた<sup>32)</sup>。

ベールイは画家マクシミリアン・ヴォローシン（一八七七—一九三二）やその妻マルガリータ・サバーシニコワ（一八八二—一九七三）らロシア人メンバーとドーム円柱の柱頭彫刻の仕事に携わった。画家としての才能に秀でていたトゥルゲーネワは、のちにドーム内部の壁画のほか、色ガラス窓の制作など内装を担当した。

だが一九一六年の春、第一次世界大戦の影響でベールイは帰国を余儀なくされ、まもなく革命が勃発した。トゥルゲーネワはドルナツハに残り、ベールイとは別れた。事実上、二人の夫婦としての関係はとうに絶えていた。世界大戦、革命、妻との絶縁など、一連の事件は作家に重大な痕跡を残したが、それは苦難にあって、死して甦るキリストのイメージとして作品に定着された。

一九一四年一月、ドルナツハへの途上、立ち寄ったライプツィヒ郊外のニーチェの墓で（後にドルナツハでも）ベールイは、聖堂のドームに聖霊が降臨するように、頭蓋（ゴルゴタ）におのれよりも巨大な〈われ〉が降りてくるさまを幻視した。聖杯（グラール）の秘儀・神秘劇（ミステリウム）である。

「歴史的時間の円錐はわたしから脱落したようだった。わたしは歴史的時間から超時間へ躍り出

30) 上松祐二『ルドルフ・シュタイナー』Parco出版、一九八〇年、三十六頁。

31) *Волошина Маргарита (Сабашиникова М.В.)*. Зелёная змея. История одной жизни. М., 1993. С.236.

32) Там же. С.240.

た。時間そのものが円環になった。その円環のう  
えに精神の聖堂ドームがある。その聖堂は同時  
にわたしの頭蓋であり、わたしの自我は「われ」  
（大いなる自我）になった。人間 человек からわ  
たしは〈世紀の頭頂 Чело Века〉になった。」<sup>33)</sup>

「戦争の最初の秋、自分が戦争を呼び起こしたよ  
うに思えた。わたしのなかで戦争がはじまってい  
た。分身たちとの容赦ない意識的な闘いは、六月  
以来激しくつづいていた（戦争勃発は八月だっ  
た）。—その頃、わたしは菩薩のように未来から  
ものを見ていた。わたしの自我に巨大な〈われ〉  
が下ってきて、一人の人間におこっていることを  
全世界があたりまえに映し出しているように思わ  
れた。」<sup>34)</sup>

一連の衝撃からくる惑乱やオカルティズムの訓練  
からくる異常に鋭敏化した感官のせいかもしれない  
が、未曾有の世界的大事件の生ずる危機の時代、新  
たな事態への過渡期には、このような個的バイオリ  
ズムと、世界そのものの震動・顫動のシンクロニシ  
ティーは充分にありうることだ。決して自我肥大や  
誇大妄想で片付けてしまうことはできない。パール  
イはヨーロッパ文化の危機を、自己意識瓦解のカタ  
ストロフィーとして捉えた。

「ヨーロッパのカタストロフィーとわたしの人格  
崩壊は、同じ出来事なのである。〈われ〉が戦争  
であるとも、反対に、戦争がわたしを生んだとも  
言える。わたしは原型だ。わたしのなかには奇  
妙なものがある。聖堂、〈世紀の頭頂〉がある。  
〈…〉〈われ〉と〈世界〉がわたしのなかで交叉  
した。」<sup>35)</sup>

このように見ると、ドルナツハ滞在からおよそ  
十五年を経て、なぜパールイがエレヴァンでストル

ジゴフスキの大著に没頭したかが見えてくる。たん  
にアルメニア教会建築への関心ばかりではない。同  
時代をともにしているものの危機意識、従来のユマ  
ニズム（人文主義）の無効化と歴史認識の崩壊がそ  
うさせたのだと言える。パールイにはストルジゴフ  
スキにうかがえる人種主義的史観はなかったとはい  
え、かれもやはり十九世紀西欧人文主義によって自  
己を形成した人間である。盟友の詩人アレクサンド  
ル・ブローク（一八八〇—一九二一）と同じく「ユ  
マニズムの崩壊」を目の当たりにした同時代人だっ  
た。

自己意識崩壊の危機を経験したパールイは、  
一九二五年から生涯最大の著作『自己意識する魂の  
生成史』（未完）を執筆しはじめた。『コーチク・レ  
ターエフ』で定着されたような、系統発生を反復す  
る個体としての自己意識生成を、世界が自己を認識  
し、地平を拡大していく文化史的メタモルフォーゼ  
の視点から論じた膨大かつ壮大な理論的著作である。  
ロシア人智学協会（一三年九月にモスクワで設  
立）のメンバーを通じて知り合ったワシーリエフと  
モスクワ郊外のクーチノで生活をともにするよう  
になり、不如意はあれ精神的に落ちつきを見せはじめ  
た時期にあたる。二度目のアルメニア滞後、パール  
イはこの著作に「聖堂建築」（三一年執筆）と題  
した章を書き加え、ストルジゴフスキの著書とアル  
メニアの教会建築をめぐって詳細に論じた。基  
本的に、先述のイワノフ＝ラズームニク宛書簡  
（一九二九年八月三十日）で述べられた内容が敷衍  
されている。

「注目すべきことに、きたるべきヨーロッパ聖堂  
建築様式の原型になるのは、古代ペルシアの諸形  
式がアルメニア人、後にはシリア人建築家の手で  
独自に綜合されたものであることだ。基本は正方  
形上の三角形でも立方体でもなく、円環ないしは  
いくつかカットした平面のあるシリンダー、すな

33) *Белый Андрей*. Материал к биографии // Литературное наследство. Т.105. Андрей Белый. Автобиографические своды. М., 2016. С.148.

34) *Белый Андрей*. Записки чудака // Собрание сочинений. Котик Летаев. Крещенный китаец. Записки чудака. М., 1997. С.361.

35) Там же. С.431.

わち多角形、または複数のニッチをほどこした多面体である。古代ヴァガルシャバト [現エチミアジン] のキリスト教聖堂はそうになっており、近郊のリブシメ聖堂もそうである。トラマニヤンが復元したズヴァルトノツ聖堂のモデルもそうになっている。復元モデルが確かであることは、アカデミー会員マールによるアニでの発掘作業で明らかになった [円形三層構造のガギカシェン聖堂の模型が出土して、ズヴァルトノツを復元しながらも嘲笑されていたトラマニヤンの正しさが証明された]。〈…〉

「アルメニア=シリアの骨格、より正しくはアルメニア=ペルシアの原型は、建築様式のメタモルフォーゼを考究する最近の形態学者や生理学者により、いたるところで見出されている。アルメニア教会をストルジゴフスキは、さしずめそこにはない頭骨の一部を見出し、頭蓋椎骨説 [頭蓋は椎骨の変形によって生じたという説] を提唱したゲーテのように評価する。アルメニア教会にとって頭蓋にあたるのは、ドームを頂くルネサンス聖堂にほかならない。椎骨にあたるのはペルシアの拝火教建築である。頭蓋の覆いが形を変えていく過渡的な局面のそれぞれに、アラブ建築も、ビザンティン建築も、西欧建築芸術も相応している。」<sup>36)</sup>

壮観な見取図である。ペールイはストルジゴフスキによる考察、教会建築のタイポロジーにゲーテのメタモルフォーゼ論を正しく探り当てた。形にならない理念やコトバを、目に見える幾何学的図形や数値的グラフに変換する、一見関わりのない建築を、生命形態学・発生学に結びつける—ペールイという稀有な天才の面目躍如だろう。

\* \* \*

エレヴァンのランドマーク「カスカード」の正面に、アレクサンドル・タマニヤン (一八七八—一九三六) の設計した「国立アカデミーオペラ・バレエ劇場」がある。平面図を見ると、南北の軸上に左右対称の円形である。かつては南側にオペラ劇場、北側にコンサートホールの設営が予定されていた。第一ゲーテアヌムの平面図によく似ていることから、タマニヤンの建物にズヴァルトノツなどアルメニア中世教会建築ばかりでなく、シュタイナーの建築理念との共鳴が見られることが研究者によって指摘されている<sup>37)</sup>。エレヴァンでペールイはタマニヤンと知り合った (一九二八年五月二十二日) が、充実した対話には至らなかった<sup>38)</sup>。稀有な理論家と、建築的・実地的天才の齟齬だろうか。

36) *Белый Андрей*. История становления самосознающей души. Книга первая. Литературное наследство. Том сто двенадцатый в двух книгах. М., 2020. С.310-311.

37) *Казарян Армен*. Архитектурная идея Народного Дома в Ереване. Размышление о творческом методе Александра Таманяна // Вопросы театра. Вып.1-2. 2014. С.267-279.

38) *Бугаева (Васильева) К.Н.* Дневник. 1927-1928 // Лица: Биографический альманах. Вып.7. М.; СПб., 1996. С.271.